しりし庵の小槌 上

社會教育

福徳之小槌

一名忠孝

學生必携

福徳之小槌

ロ 9
1072
1

門口 109乙 1-2

序文口絵ヲ除キ
本文十六丁迄 内 挿絵六丁
二十丁

序

果報は寝て待てと或人の指図にまかせ。枕紙を引しきて夢を結ハ。去年の古年越大卅日の夜の明方。万とならふ比まで。乃恵方よるま。福神がござるに。一小

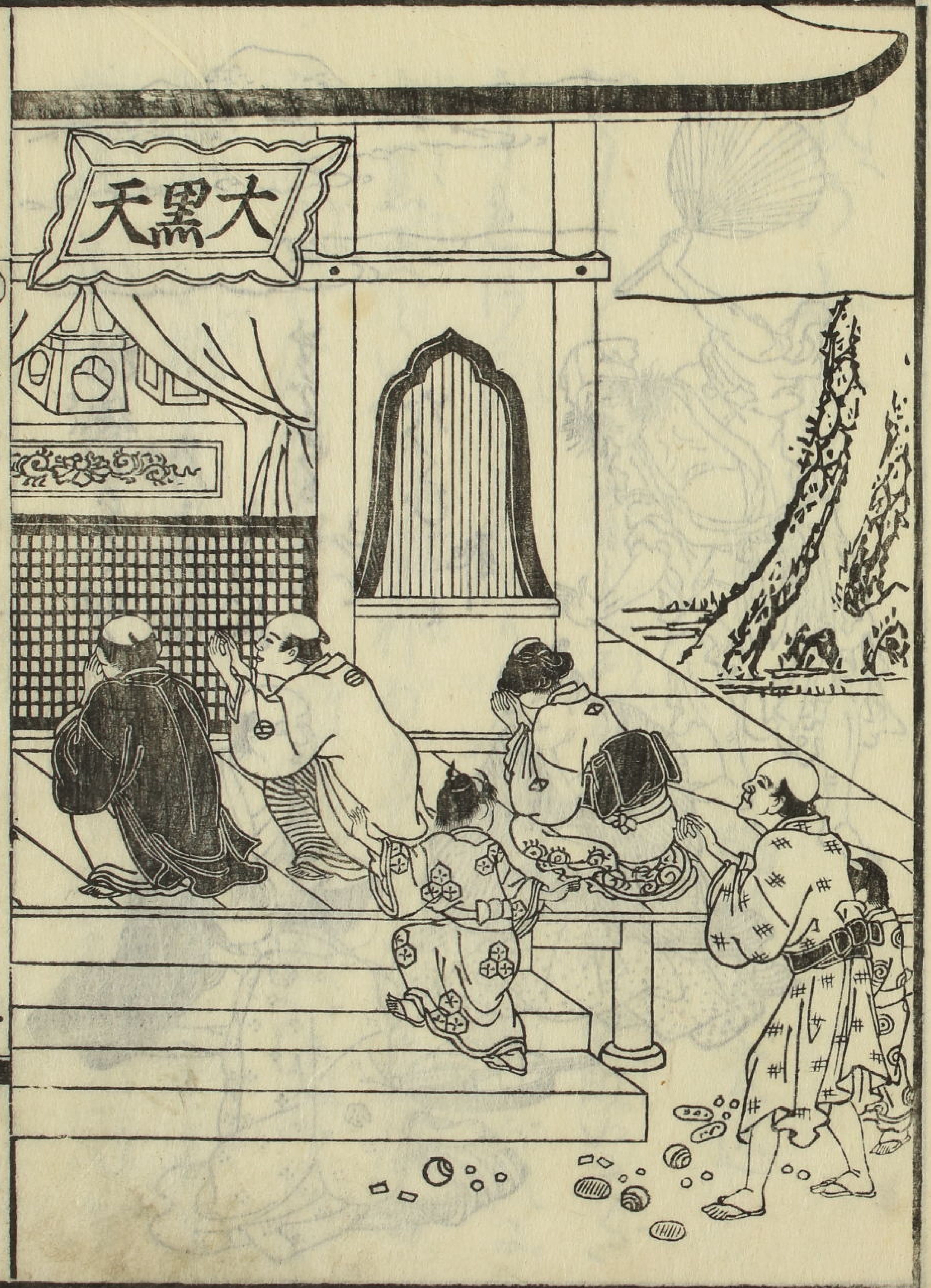
家紙富貴さんとて。武ゑは二冊乃
書を持。三〻ゑさらく讀経を。此書
を海ふわさふ着し。早く目開く
見さらぬく。此本紙乃んさいなと。
の玉ふ変と鶯乃。初音ふ驚き
起出く。新ふ成月れ出を為とく

祝ひとまをしぞ。蓬莱山も外ならぬ。
三寶乃よゑ福神徳の小槌といふ。
壱部の書あらま。扨も萬ふ神れ
告給ひしハ是たりとおしへぞ。
すぐにまた開て御代の春おしへり
くるまと志て朝の間ろ。早立りけく

大福紙持来りし神の恵かん
目出度さも。御慶は袴やよ上ますと

寛政二年
戌の春

室樂亭識述


大黒天

心さへ誠の道を正直に
行あるそらふ福徳そある

教乃小づち

脇坂義堂述

むかし〳〵其昔し。天竺乃横町。竪町いまぶきうもげる心はすやかりしん。日向邑の里ぞくれは。大黒天と云長者。福神ありて金銀五銭にようのみたゞ。おまほく人の願ひかなふかくと打出の小槌より。出しけくなるて。老若男女群集し集りくる。其中ふ。年ハ二八乃

花ざかり。ぬよふの談ゞせ。咳は肩をあつはして。
霊のうれこし。須弥山のおとくいの廣さる。
蒼溟海ぶ螃蟹まり。泰山をまれじさし。和
海と飛越てうつむけふうけなりとも。鼻の先ん
とうつ。帝きどひのなさ。大根神の姫さん。そとを
出て。あれくし。手を合していきく。姫御おと
まり行し者は。三十一相ハ。かあるりげはそうひ
絵などちんをなる手ハ。此鼻で一相かけられ。

三十二相は。其をおもまて。維がまでまさり。鹿目
とはふ人もなく。縁談は咲合も。此鼻のかざ
あきせでさそふ水のなうれて。朝夕むすめ
をやくしまんさくは。ご嫁と。せさこそため
徒く人が起つき。会事もそくまん。此招き
豹の間が落ましても。やりがる鼻がなるとも
ならんば。さんさでくし。かなしくござります。
行平くし。よひなひ鼻を打出してくださりませ

○大黒天うちうなづき。しばらくありて。うちでの
小槌をふりあげ給へば。娘の凹鼻のうへよ。ひら
〳〵やく象牙のごとき鼻。忽然とあらはれしを
娘。額をおさへて撫て曰。早速の御利生にて
鼻も高くなりて。嬉しく存ずれども。さて
額がひつこんで。気味わるくて。頭痛がいたし。
其上。鼻の上に小鼻が出来て。撫で今までよりも。
猶くるしく。なんぎにぞんじます。何とぞ

今一度。御仕替なされて下さりませ
○大黒天答て曰。今迄度々仕替たれども。同じ
事なり。此上は。我等が力に及ぬことぢや。そこに
汝が撫し作者乃父母が力にも及ぬ
ものぢや。親の力にも及ぬ所が。天命なり。
総じて。汝が身は。父母が細工物なりとはいへ
ども。其元をさぐせば。天命の細工なり。天命乃
細工すれば。天命の作者を粉して。天命の心に

そむくハ。凹鼻も高くなるべし。其天命ハ
作者のしんぷ。かならず抱ふしなるまで先生ぞ作
者ハ父母を。大切にいたし。父母の心にかなふ事
なり。前にいふ。我生所よ。汝らも。三割ぐらゐ
凹鼻ハ姫にかしが。生れ付て孝心あつく。
父母につかへて。我身ともゝ。我鼻が凹やら。
高ひやらとんちやくなく。親のことだけやう
致し候ゆゑ。自然と。此女の鼻の凹ひつどん偏刺ら

やさしくも可愛らしけれ
我鼻乃ひくさよ身を
謙遜ちる人

口繪之内

父母ハ家業
大切にせは
子槌ふそ
このうんも
かれ
寶

ありなり

消えて孝行の名あるく四方よかくれなけれバ。
其所乃太守より是をひとくて。妻としめひ
給へど。我のミなし児。親兄弟。一家。一門までの
墓を守るにせしそりや。我同じ所よ。見目形。
世ふまぐれしうるはしき姫なりけるが。父母よ
妻へがしくんざめ。正しかりけるしかバ。親類よ
見んむかしよりしなき男といひきりしく。我
身乃み。親兄弟。一家。一門までの墓を。引くし

縁をあさくしるや。爰をわりいで。人の身の上
乱るるも。円満するも。其目のうしなし。鼻の
凸凹よろしからぬ事にて。其心れよしかりに顔
正しからず。縁もとるらり。まことはそらう。みだ
事を止て。心を清くまがくべし。心とたるすて。
みだく時ハ。世の人。縁が心の清さをみて。鼻の
凹きを延ざるべし。容形をよく時ハ。世乃
人縁が。なりかたちをみて。鼻の凹きと。わる

くらんれ心おろうみ清さなきを。悪と知べし。
今縁が。鼻の上へ。これ鼻をおかして。わるさまを
なすも。縁ハ。悦て形をあらハし。引つり。ひくやうく
くるしく。又いんともなさざしいふまわらずや。是まて
万事を考ふべし。古事にも
浮世ハかりまよてある生れちわ
こころもあらね我なることくさか
浮世ハ。鼻が凹く生れこひとて。鼻が凹く生え

来りしみもわるし。貧乏に生まれきたとて。貧乏人の種へ。やどりし身もわるからず。百姓になりたりとて。麦飯の中へ生まれて来てもくにもなく。町人になりたりとて。商人の家へ生まれ来たりとてもなし。見目のよしあし。禍福吉凶。貧福ことも。皆天命のさづかりなれば。鼻の凹ハ凹ひなり。銭のないはないなりも。鈍な者ハどんなり。不器用なるものハ。不器用なり。不学なるものハ。

鼻乃さえ
智恵も
れ
我慢を
及ぶ
侍じ
誠の
人ふ

あさ
時ふ
い

不具なりで。我生れつきハ背がかゞまりて。少も何つもうかざらず。こうしへぬこそ。却て人ハさきものなるに。鼻の凹が。鼻ハ凹をかくさんとて。汝がおく。又一ッ鼻の上に。鼻をこしらへる。人もそ知らぬハ。我もくるしみ。貧乏人が。貧乏をかくさんとて。借銭のうきぬりして人にも知られ。我も苦しき。鈍なるものが。利口ぶつていハ。人にも知られ。我もくるしみ。不器用者が。

窮屈なる顔をして。人にも笑はる。我も
苦しむ。是皆生れ付は。天命に叶ひ。己が
知恵を以て。拵へしやうなるも。海も生れ付
の天命に叶ひく。凹鼻は凹なり。ふさ目なく
不器量なりに。不細工なりとも。生れつきをたしなめ
心はなどか。愚きはうつさずうつさるらん。
只しかうをとらかくべし
極てしんよ鼻なれそぶるね里もなし

こころがけこそ身はいやしけれ
○婿。顔をおもていろく。随分の泥名んなく。
鼻をうるふするは。やさましきもじ。何をいふ
ても。此指が。猪首では。一生の身の治りも。
おぼつかなふぞんじます。竹箒もとしろが
かるづきあるれ。あさ眼と。鼻の縁ふかく
ざうり。沢山よごつさりて。打ましておまり
ませ

○大黒天。かされならバ。ゐろうとて。打出乃
小槌をふりかけずんば
○娘。鼻をおさへ驚きていふく。式銀を打出し
なくしこそ粉うしふ。式銀所ろ。我たださく
凹き。此鼻を。今まさ。生れ付さしうとも。
五割ござも凹めなましかバ。いかなる事ぞと
むざと言なくとせば
○大黒天。目をいからして曰。詞もんをしやくんで

お娘。我いふ事をよくきけよ。我今海の鼻
とつ生れつきしより。五割ござ凹め。はつゐせしハ。
海が。一生れ身の治り。鴨資福家をわさへし
なり。海よかりしバ。世の中乃人。金銀さくお
まざし。凹鼻も高ふなり。不実。章僕も金銀
みてすみ。只何事も金銀さへあれバ。一生れ
身の治りハ。なるやうになりふ。おろかさに。纏よ
我身をそてとなり。金銀を出れおくくよ拙

迚も。人ハ縁の一ツがかけるバ。其の障りハな
らねぞかし。今汝は式眼とあるべけれど。式眼の
あるに。鼻を高ぶりて。凹き鼻を見下し故。
幾度嫁しても。去れて終るべし。今我汝が
鼻をも。御剥げき凹めて。缺をいせしこそ。是迄ぞ
汝が一生の福徳まで。縁を結ぶの守り神。
その縁は。只さく凹ひ。其鼻が。御剥分凹と知りて。
我身を恥て。物事にへりくだる。身を慎む

さゝ波ざる
馬のすゝまじやと
孟之反
我が高名にのらぬ人かな

故よ。都て人の愛敬あるなきも万此身が。汝
道理なく。我生れつきよりハ。五割ましと
知らバ。一生一代の。福徳の升り計え。壱貫
文の身体の。貧乏人が。五割方凹くなりて。
我身体ハ。五百文なりとおもひて。倹約して。
安楽に世を渡るべし。百貫目の。身体乃
金持が。五割ぐらひくなりても。五十貫目乃
身体なりと知りて。身を奢らずんバ子孫長

久繁栄なるべし。博識多能の人たりとも。我博識多能よりハ。出る割方をさけて。遠遜に情まなば。人よろこんで用ゆべし。一文不通の文盲たりとも。我文盲よりハ。出る愚方。ひくゝなりて。我ハ古今此鈍物なりとて。我おろかを恥ぢず利口物と。人恐て安すべし。是をよけて考ふべし。いかほど盲目よく。発明でも。今持ぐも

博識でも。多能でも。我持前より。一寸でも。鼻が高くなれば。人ハいとふ所の禍をまねくなり。いかほどふさまなり。鼻ひくでも。根がなくても。鈍物でも。不学でも。我持前より。出る割方。鼻をひくめて居るときハ。人も愛し。身ハ楽みて。其上や佛も。冥加あるべし。今汝が鼻を凹めしして。おのれ盲目をよくするハ慈悲な

きば。栄耀で鼻かむ様な。藪くなりし
藪ふ越えりに
福徳とうちおれ槌に付よりも
我慢の鼻をへしぐ事なるべし

藪くの小槌巻之上　畢